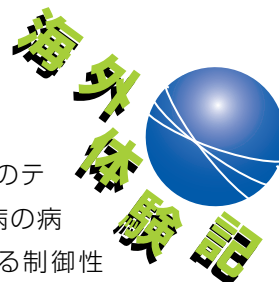


米国フォーサイス研究所を訪れて



徳島大学病院(歯科)むし歯科

中西 正 なかにし ただし

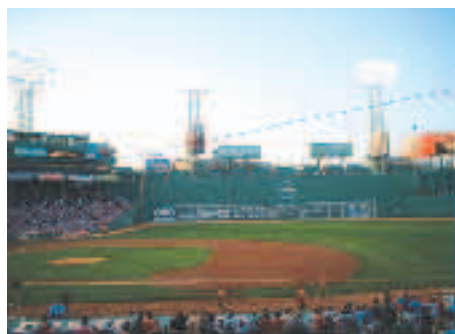
2004年3月から2年間、米国マサチューセッツ州ボストンのフォーサイス研究所免疫学研究室にて研究に従事しました。ボストンは、ヨーロッパの雰囲気有するレンガ造りの町並みと近代的な高層ビルが入り交じり、歴史的にはアメリカ独立の舞台になった町です。ボストン周辺には、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学など60ほどの大学が密集しており、そのためボストンは全米有数の学園都市



灯台



エーコン通り



フェンウェイ球場

として数多くの若者が集まってくる。気候面では、徳島に比べると冬が長い上にかなり寒く、マイナス20℃以下になった日や一晩の降雪量75cmという日も体験しました。芸術・文化面においては、ボストン美術館やボストン交響楽団が有名であり、プロスポーツチームもMLB、NFL、NBA、NHLの4大プロスポーツがすべて揃っています。なかでも、2004年はMLBのレッドソックスがワールドシリーズを制し、「バンビーノの呪い」が解けたことで街中大賑わいでした。

フォーサイス研究所はボストンの中心部ダウントウンから南西約2kmのところの位置し、前述のボストン美術館のすぐ近くにあります。創設者であるフォーサイス兄弟が1910年に小児歯科診療所を開院したのが始まりで、歯科臨床を行う場としての役割が中心でしたが、1960年頃より徐々に研究の方へシフトしていき、現在では歯科とは直接関係のないラボも存在しています。私が所属していた免疫学研究室は、主として、う蝕ワクチンの開発と歯周病の発症・進行における免疫機構の役割について追究しています。10人程度の少人数ラボでしたが、半定期的に開催される抄読会以外は特に縛られることもなく、自由に時間を使うことができました。



フォーサイス研究所

私の滞在中のテーマは「歯周病の病態形成における制御性樹状細胞の役割」を明らかにすることであり、主に培養細胞を用いた実験系にて研究を進めました。その結果、歯肉上皮由来細胞が免疫調節機能を有する樹状細胞の誘導に関与するという知見を得ました。滞在期間中、不慣れな英語ながらも討論を行ったうえで研究できたことは、非常に有意義であったと感じています。

異国の地で生活するにあたり、最も大変だったのはアパート探しに始まる生活基盤を確立することでした。医療保険制度など日本とは異なったシステムも多く、最初の数ヶ月は戸惑いの連続でしたが、「郷に入っては郷に従え」で、慣れてくると近くの観光名所に出かける余裕も出てきました。私は家族と同行しましたが苦勞を分かち合うことで家族の絆も強くなった気がします。

最後に、今回の滞在の機会を与えて下さいました大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・歯科保存学分野の松尾教授をはじめ教室の方々、ならびにボストンでお世話になった方々に厚く感謝いたします。



大雪